

1、2歳児の「イヤイヤ」は どんな特徴？ どうかかわる？

その1 食事場面

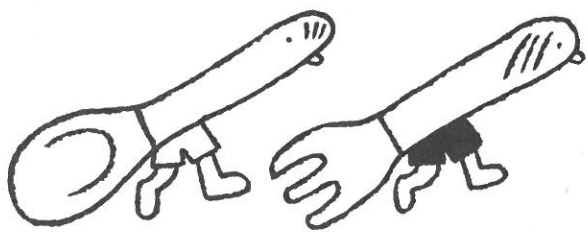
第2回



共立女子大学

河原紀子

かわはら のりこ／早稲田大学人間科学部助手を経て、現在、共立女子大学家政学部教授。著書に『0歳～6歳子どもの発達と保育の本』（監修・共著、学研プラス）、『子どもと食：食育を超える』（共著、有斐閣）などがある。



前回、好き嫌いの始まる時期は1～3歳未満が多く、それは自我の芽生えの時期と関連していると述べました。2歳前後の何でも嫌がる姿について「魔の2歳児」と言われたり、その時期を「イヤイヤ期」と表現されたりします。欧米では「terrible two」（恐るべき2歳児）と言われ、この頃の子どもたちへの対応に苦労するのは万国共通と言えます。なかでも、身辺自立に関わる場面は、大人と子どもそれぞれの意図や要求の対立が生じやすく対応にも苦労することが少なくありません。そこで、今回は食事場面の子どもの特徴とかかわり方について考えたいと思います。

●手づかみから道具使用へ

はじめに、食べる行動の特徴からみていきましょう。1～2歳にかけて、子どもたちは食べさせてもらうだけでなく、自ら手づかみで食べ始め、次第に道具を使って食べるようになります。その詳細について、保育園の0、1、2歳児の食事場面を観察し、1回の食事で「食べさせてもらった回数」「手づかみで食べた回数」「道具を使って食べた回数」の割合を調べました。その結果、0歳後半から手づかみが始まり、1歳前半に道具を使って食べ始め、それに伴って食べさせてもらうことは減少しました。その後、2歳頃に道具使用が手づかみを上回るようになるという特徴が見られました。

道具の扱いは、1歳の子どもたちにとって魅力的ではありますが、簡単なことではあり

ません。そのためか、道具が使えるようになる前に、興味深い現象が見られます。それは片手に道具を持ったまま、手づかみで食べるという行動です。これは1歳前半から半ばにかけて一時的に増えその後減少します。道具を使いたい時期にその気分を味わうような行動なのかもしれません。

また、道具が使えるようになると、一度でうまくすくえなくても、何度も繰り返しすくおうとし、食器の外に飛び出した食べ物を手づかんで、わざわざスプーンにのせて食べるなどもします。手づかみの方が簡単ですが、道具を使って食べるという新たな挑戦が楽しいのだと思われます。ここにも、自分でくくしてみたいという自我の芽生えの特徴が読み取れます。そのため、この時期の食事場面では、子どもが自ら道具を使って食べる魅力を味わえる環境づくり（予め新聞紙やシートを敷くなど）や、それを見守る気持ちの余裕が大切です。とはいえ、道具が使えるようになるまでには、うまくすくえずこぼしたり、使おうとしていて遊んでしまったり、家庭ではついつい食べさせてしまうことが多くなるかもしれません。そこで次に、1、2歳児の食事場面を家庭と保育園で比較した結果について紹介しましょう。

●家庭と保育園における食事場面の比較

食べさせてもらう行動や自分で食べる行動、また食べることを嫌がる「拒否」などについて調べた結果、1歳前半では保育園よりも家庭で、食べさせてもらう行動や拒否が非

常に多いことがわかりました。

特徴的なことは、保育園では食事の後半、つまり空腹が満たされてくると拒否が多くなるのに対し、家庭では食事の前半から見られることです。例えば、食事の開始時に、子どもが自ら手づかみで食べようとしているところへ母親がスプーンを差し出し、子どもはそっぽを向いて食べないというやりとりを繰り返す親子もいました。また、子どもがサンドウィッチのハムだけ食べようとして母親に止められ、本当は食べたいのに始まったばかりの食事を終わりにしようとする様子もみられました。これらの子どもたちは、保育園の食事場面では開始から手づかみや道具で積極的に食べ、拒否があっても保育者と楽しい雰囲気できりとりする様子が見られました。

このことから、子どもたちは1歳台からすでに家庭と保育園で行動を切り替え、保育園では社会的に振舞い、家庭では甘えや強がる様子を見せていることがわかります。職業としてかかわる保育者とは違って、家庭での親は食事の作り手でもあり、食べてもらいたい気持ち、食べてくれないときや汚されたときの苛立ちは当然大きくなるでしょう。ただ、子どもの拒否の理由やかかわり方のヒントを知っていると、気持ちに余裕をもって楽しくかかわれることもあると思います。

●食べるイヤイヤを拒否する理由と対応

～保育園のやりとりが～

1、2歳児の食事場面における拒否の事例を集めてみると、拒否の理由やその対応は、

月齢・年齢とともに変化していきます。

まず、苦手・嫌いな食べ物を拒否するだけでなく、好きな食べ物（果物や食後のデザートなど）が目に入ると、今まで食べていた食事を拒否することがあります。1歳前半では「ご飯食べたら、みかん」などと言葉で説明しても、果物に気を取られ聞き入れられません。それが1歳半以降、その言葉の意味を理解して食べようしたり、「あと一口だけ」の促しにも応じるようになり、「ご飯↓果物」といった次の行動へのつながりを捉えることができ始めます。

また、同じ食べ物でも食べさせてもらうことと自分で食べることで子どもにとっての意味が違ってきます。なぜ同じ食べ物なのに？ と不思議に思うかもしれません。先の家庭での拒否でも見たように、自分で食べることに自我の芽生えとしての意味があるのです。

さらに、1歳後半から2歳台になると、子どもが主体になれるような言葉かけ、場面づくりの工夫がより重要になってきます。この頃の拒否で注目されるのは、初めは拒否していても保育者のかかわりによって、5～8割が最終的には食べるようになることです。そのようななかかわりのうち、私が保育園の食事場面を観察して興味深いと感じ、またわが家でもよく活用した2つのかかわりを紹介しましょう。

ひとつは、「○○見ててね」と子どもが食べる行動を誰（何）かに見ってもらうように促すかわりです。○○には、友だちや他の